2021.9.19

日本語教育・学習体制をいかに整備すべきか

外国にルーツのある子どものことばと学びを支える

石井恵理子（東京女子大学）

1.　多様な子どもを取り巻く環境

- 自分が向き合っているのは、どんな子ども？
  - 子どものどのような側面や特性を意識して見ているか
- 家庭の状況
  - 親の生活／就労状況、言語状況、移動歴など
- 支援者
  - 個人か組織か、同国人コミュニティか, 日本人か、など
  - 相互の関係、支援の内容や頻度など
- 支援の内容、状況は？
  - 物理的環境、開設の理念や目的意識、活動頻度, 活動資金など
  - 自治体、その他組織等との連携状況など

2. 成長･発達を支えることば

- 人としての成長･発達の全てに関わることばの力
  - 全人的な成長･発達を視野に入れた支援
    ことばを育む
- 子どもの発達に即した支援
  - 母語がどのくらい伸びているか
  - 身体、情意、知力、社会性など各側面の状況は？
- 言語接触の量と質
  場や相手、活動などによってことばの使用は変わる
  子どもの言語発達を見る視点は適切か

ことばが育つとは
人が豊かに育つこと

3.　ことばを育む

- 分かる・伝わる・つながるよろこび、楽しさが原動力
- 伝えたいこと、伝えたい相手があること
- 受け止めてくれる相手がいること

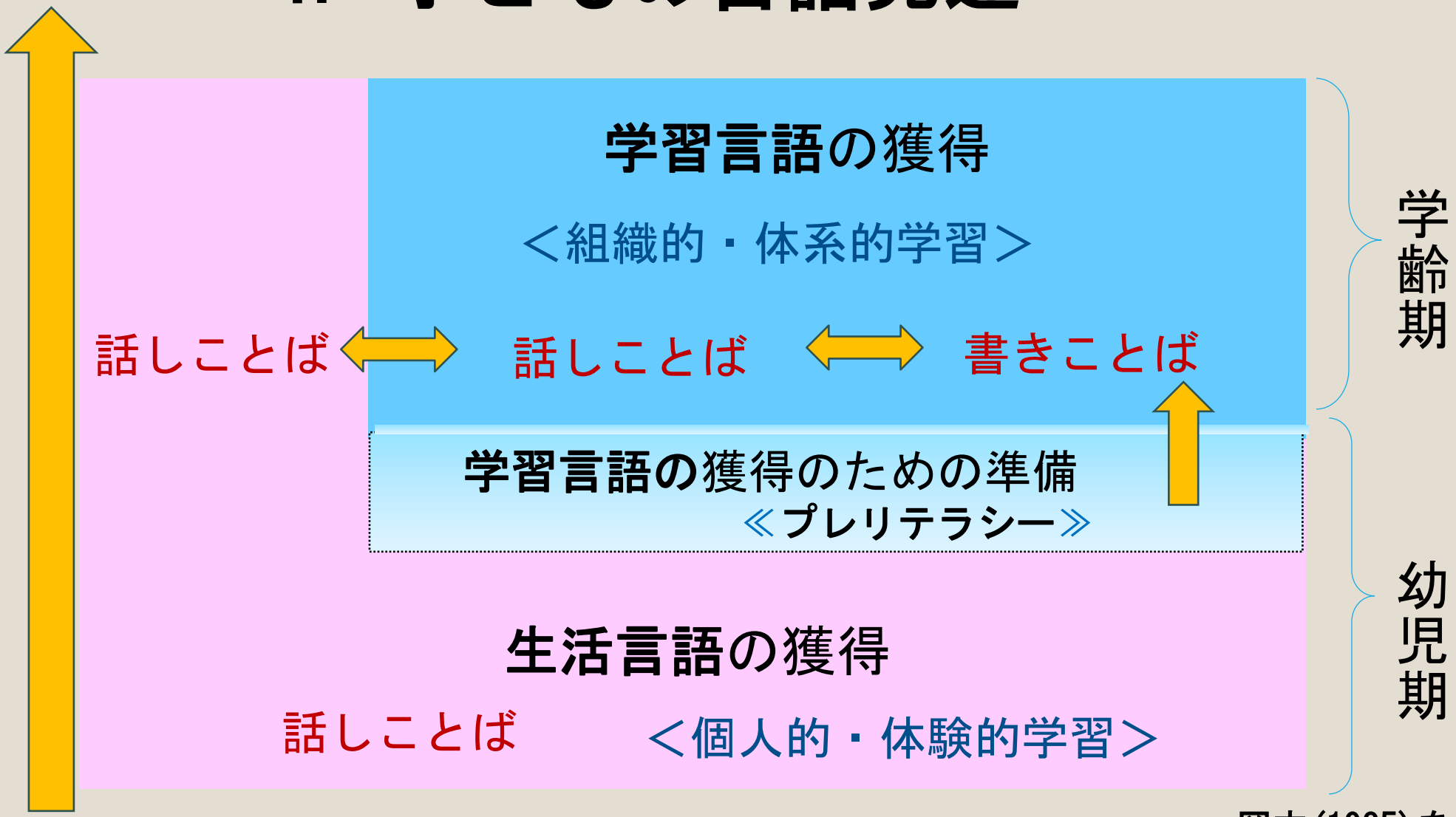
好奇心がことばを育てる

ことばの適切さ、正しさの追求は、**関係性の構築**が基本！

その上で、子どもが興味･関心を持つ活動を考える

指導は不要、互いに提案できる場づくりを！

4. 子どもの言語発達



岡本(1985)を参考に作成

5. 教科学習を支える

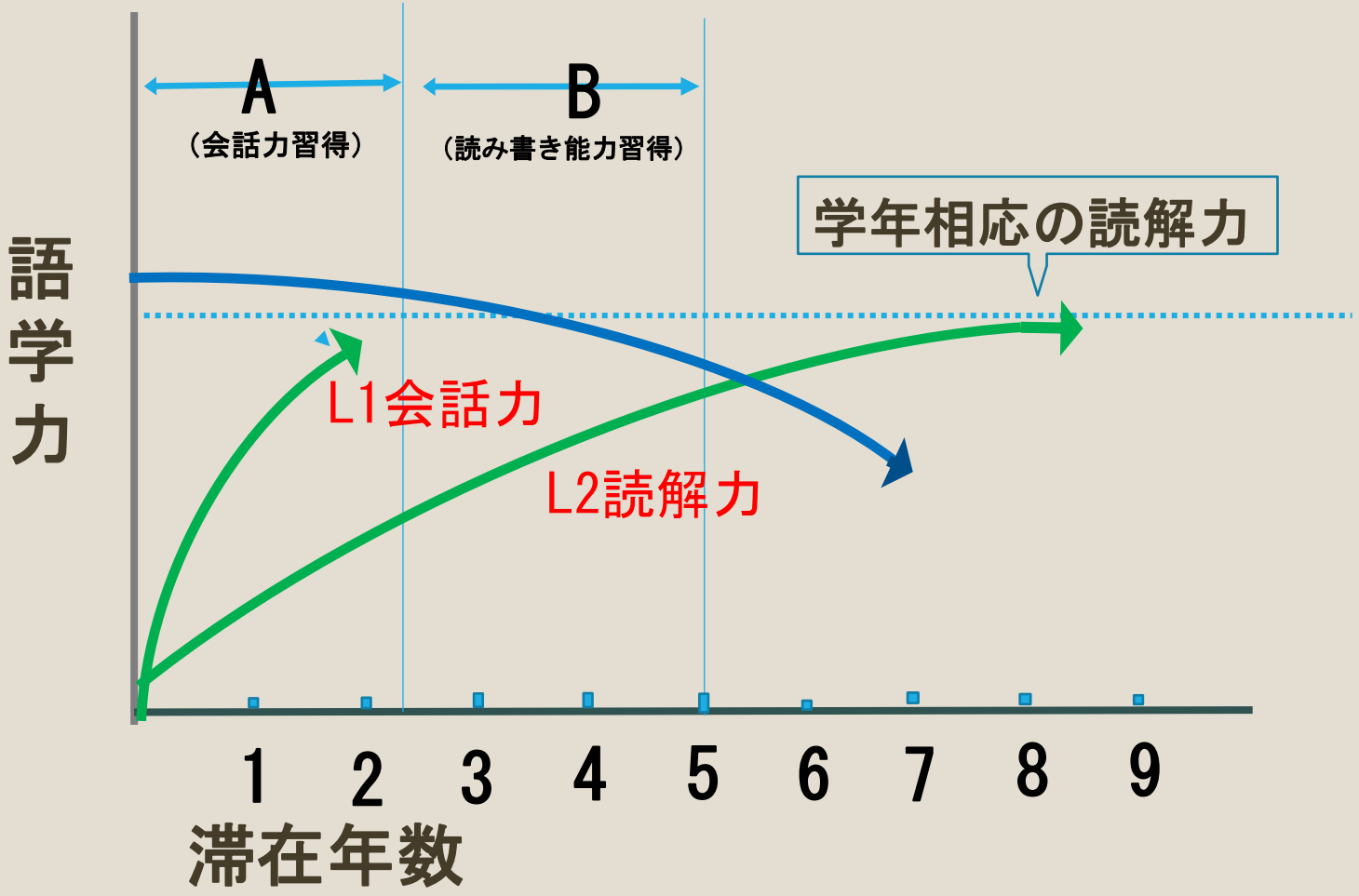
「やる気がない」
は子どものせい？

- 学習のためのことばの力を育てる支援
  - 学習場面で行われる言語活動
  - 比べる、分ける、関係づける、順序を示す、因果関係を述べる･･･これらは日常場面の中にもある！
  - 教科書で学ぶことは困難でも、子どもの身近な素材や経験を活用して学ぶことは可能
  - 興味･関心を持つ ⇒ 知りたい！伝えたい！深めたい！
  - 作業ではなく、**学び**の活動を

ことばが欲しい

母語の活用

滞在年数と2言語の力の推移（中島1998より一部改編）



6.「子どもを支える親」を支える

- まず、親は社会に支えられているか？
  - 親もことばや文化の壁、人的ネットワークなどリソース不足などにより、情報の得にくさ、ネットワークやリソース不足等により、異文化社会で十分に力を出せず、子どもを支えられないことが多い
  - 親と子が十分に「対話」ができることばを保持する
- 親と子が社会とつながるための支援が出来ている？
- 地域での取り組みや、学校行事を活用した関係作りなど

7.　言語の豊かさは、社会の豊かさ

- 日本社会では、言語に値札がついている！
  - 言語の位置づけでは、マイノリティの母語より、英語や日本語に高値がつく
  - 外国につながる多くの子どもは、自分たちのことばを「価値のあるもの」と思っているか？
  - 英語など特定の外国語を高く価値付け、他の言語の価値や豊かさを否定する意識は、なぜうまれるのか？

先進事例　スウェーデンの学校教育における少数派言語児童・生徒の母語教育

- 同じ母語のこどもが5人在籍していたら、母語話者教員による母語の授業が開設される。単なる言語学習ではなく、文化的活動など、豊かな言語活動を通して母語をしっかり伸ばしていく。

言語マイノリティの子どもが、主流言語と共に母語力も十分に伸ばしていくことを政策として保障する社会

（スウェーデンの事例）

- 公用語：　スウェーデン語　　複文化主義
- 人口： 1023万（2019年）
- 国の少数言語：　サーミ語（先住民族として特別な地位を与えられている）、フィンランド語、イディッシュ語、メアンキエリ語、ロマニ・チブ語
- 外国生まれの市民の割合が最も高く、総人口の19．5%（2020、スウェーデン、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド比較）
- 母語に関する公的支援：

  ①母語を使った学習支援　②母語を学ぶ母語教育
- アイデンティティ・個性の形成